

翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書（五）
—手銭記念館所蔵俳諧資料（一〇）—

伊藤 善隆^a

^a 湖北短期大学非常勤講師

【キーワード】

俳諧 伝書 『深秘十八体』 手銭有秀 「諸国俳人名寄」

はじめに

本稿は、島根県出雲市大社町の手銭記念館に所蔵される俳諧資料の中から、『深秘十八体』（写本一冊）と「諸国俳人名寄」を翻刻紹介するものである。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点を補い、改行を適宜改めた。また、片仮名は平仮名に、異体字は概ね通行の字体に適宜あらためたが、小字で添えられた助詞の片仮名など、原本の表記を残した部分もある。「より」の合字は「より」と翻刻した。濁点は原本のママとした。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、（ ）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

誤記と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「（マ）」を付した。難読の箇所は□で示した。虫損により判読が困難

な箇所には、その傍に「（虫損）」と付した。

頭注がある項目は、まず本文を、続けて頭注を翻刻した。頭注部分の翻刻は「（※頭注）」と冒頭に注記を加えた。頭注部分の丁移りは、本文とは別に付した。

参考のため、原本の図版を最後に示した。

一、『深秘十八体』

〈解題〉

本書には、序文や奥書がなく、成立や書写者、書写年次などは不明である。また、「日本古典籍総合目録データベース」（国文学研究資料館ホームページ）にも収録されていない（平成30年1月現在）。ただし、伝書には、同内容のものが異なる書名で伝わる場合も多いので、別の伝本の発見は今後の課題としたい。

なお、内容に注目すれば、本書十五丁裏に「嗅洞」という俳人の句を引用して、「かくほら、半時門人、天明の比の人」と記しているのが、本書の成立は寛政期以降であると、いちおうは推測することができる。

内容は、前半が「切字」について十八箇条の秘説を述べたもの。後半が「哉に五品有事」以下、十三箇条について説いたものである。前半部分には、「有也無やに曰」と、『有也無也関』の書名が散見される。そこで本書と『有也無也関』と比較すると、同書の「十八躰引手尔葉」でとりあげられる「切」と本書で取り上げる十八条の「切」全てが一致し、例句としてあげられる句も概ね一致する（本書で一句のみの例句を挙げる場合はその全てが、複数の例句を挙げる場合はその内の一句が、『俳諧有也無也関』の例句と同じである）。ただし、本文そのものは、「をた巻にては」「伝曰」「格法曰」「盛

曰」などと諸説が引用されており、頭注にも「再按」「再々按」などとして記述があるなど、かなり異なるものとなっている。

『有也無也関』は芭蕉の秘伝に仮託した蕉風俳論で、いわゆる偽書である。しかし、写本も多く、明和元年以降たびたび刊行されてもいる。手銭記念館にも、「延享四年八月十八日 手銭冠李」の奥書を持つ『俳門有也無也関』(大本一冊、扉題は「俳門有也無也関」と、『有や無やの関』(大本欠一冊、「巻の上」存、年記ナシ)が所蔵されている。両書ともに、朱筆で講説が書き入れられており、その学習の様相を知る事ができる(書き入れの内容は、両書でほぼ同じである)。本書は、『有也無也関』の受容や、「切字」に関する俳論の展開を探るために重要な資料であると考えられる。

〈書誌〉

『深秘十八体』

書型……写本一冊。大本。袋綴じ。楮紙。

表紙……焦茶色原表紙。縦二五・一cm×横一七・三cm。

題簽……左肩無辺原題簽。紅色刷毛目布目料紙に「深秘十八体」と墨書。

内題……「十八体切字伝」。

写式……無辺無界。每半葉十一行内外。

字高……一五・八cm(本文四行目「此句く体なり」を計測)。

丁付……柱に「二」く「十五」と墨書。但し、第二丁の柱には虫損があるため丁付の存否は不明。また、十六丁・十七丁には丁付ナシ。

丁数……全一七丁(墨付一七丁)。

備考……傍線や「○」、「」などの記号、見消チと訂正、ルビ、頭注、また一部の傍注は朱筆で書かれている。また、

一部に貼紙で本文を訂正している箇所がある。ただし、本翻刻では煩瑣になることを避け、いちいち注記をしなかった。

〈翻刻〉

深秘十八体

十八体切字伝

○挨拶切

いささらは雪見にころふ所まで

此句、人を見送りに別る、時の体なり。いさ、らは□、見送る人より行人へ挨拶つ也。爰にて自他わかる所切なり。

挨拶する人は、句面に頭はれ、行人は心にある也。上五文字にて目他別也

をた巻にてはいさの二文字を切とするなり。いさ、せたまへなと言時は、いかにも(虫損)「(虫損)いさの二文字ニ而自他分明也。

也。

○中の切 美濃にては自他切と言

猫の恋止とき。関のおほろ月

有也無や三曰、猫の恋心は寒の明なり。朧月は立春後にして、寒と春との境。七文字の中にて心言葉ともに別る。是を中の切れと言。

盛曰、猫の恋は春気也。恋やむ時、寒の明なりとは不審。

按、花さくらと言ふ語を桜かなと置、咲終るの語を咲みたる(二)の格にて、恋止もこひそそむ初との事歟。又は暮春

「(表紙) (題簽)」「(表紙) (見返し)」

の句歟。暮春の句ならば、吟し終に晴る、と語を付て聞へ
きや。何れにしても時の字にて切る、也

やすくと出て。いさよふ月の雲

○自他切

人に家をかはせてわれは年忘れ

子細なし。人に、我は、と言所自他なり。

○無名切

咲みたす桃の中より初さくら

有や無やに曰、無名は一句の立所なく、何を切字とも用ら

れずして、唯音に切あるを無名と言。其心は、咲みたつも

咲終るなるへし。咲終ると上に置いて、座にさくらと綴らは、

理に落、誹道にうすし。さるを、みたすと心を隠して無名

となれり。

伝曰、無名は心はきれて言葉続也。

○玄妙切

春もや、景色調ふ月とむめ

有也無や曰、玄はヲクラキ也。妙にして心言葉も及はず。

格法曰、三段切の様なる切にて、其時の景物数々言て、幽

に遠き也。

盛曰、此句梅の句にもあらず。月の句もあらず。只、寒去

りて、麗和に成たる句也。月とむめは春光の形を見せたる

計也。何を切とする所もなく、いつれを題、いつれを曲、

何れを流ともわからず。去ながら、平句あらず。慥発句

なり。

按、切字も、題、曲、流も、一句の中へ籠め、^(三)ホ句
の躰備る。是、ヲクラクタエナリの義理に叶ふへし

又曰、や、と言心と調ふと言へる言葉、とに切籠る也。可味。

或人曰、此句は唸し終てとの字を付る。隅の手尔葉也と言。

二書二曰

月ほそし桂やしけりかくすらん

名そ高き月やかつらを折つらん

右、しそやの分別と言、是也。はね申内^(三)に切字三ツ有。

現在のし、やの字、覽留り、以上三ツ有。また、その字入

ても、やと切、はねても玄妙のホ句也。是によりて、し、そ、

や、の手尔葉とは申なり。

昨日より山の端遠く霞らん

此句も玄妙なり。

格法伝曰、

しそやの分別と言、是也。そかやか句の中に入れては

はねられず。しやらん、そやらん、如斯誹林良材にも書たり。

證^(三)に取かくし、^(四)右玄妙の両伝何れを是とし、何れを

非とせんや。

(※頭注)

再按、や、と言ふ語、良久敷、良しはらくなど続けは、春も良有

てと言事歟。左すればスミノてには也。唐崎の松抱へ字の句を、

有や無やも格法^(三)大廻しと有。春もや、の句、心切なるを玄妙切

と言も、右様の類歟。

再々按、此や、良にあらず。漸也。句意は、月はおほるなり、

梅も句ひ出て、やうく春の気色調ふたりとの句也。

梅花仏注することく、漸調ふと言所に文字余る。是切也。句の仕

立の名目は、玄妙と言切は心切歟。玄妙切は、し、そ、や、定法とすへし。 (ウ三)

三段切のやうなる切にて、其時の景物、数々言。是を考れば、し、そ、や、の伝、可なる歟。し、そ、や、は連歌の伝也。 (ウ四)

○二字切

秋冷し手毎にむけや瓜茄子

別に子細なし。二用を立ルなり。切字は現在未来也。二ヶ所切つて句すみやかなり。扱こそ二字切と言。

○三字切

子供等よ昼顔さきぬ瓜むかん

二字切と同じ。三字に三別の用を立ル。切字は三世なり。 (ウ四)

○二段切

桜かな小町かあねの名はしらす

此句は花さくらと言句也。前に子細なし。一句に二体を顕はず也。

列にも朝にもつかす瓜の花
唐鯉も空也のやせも寒の中

○三段切

目に青葉山ほと、きす初鯉

三体を顕はし、三用を立ル。三体は、青葉、時鳥、初鯉。三用は、目、耳、口、也。 (ウ五)

二書曰、三段切は物を三つ分つ事にて、別ニ子細なし

○尔廻切

桐の木に鶉なくなる屏の内

袖の花にむかしを忍ぶ料理の間

尔まはしは、陰終て、跡へ、見れば、聞けは、と言葉を付てまはる也。此句は座の五より陰し始々、中七文字におはる。

「(ウ五) 屏の内キケハ桐の木にうつらなく、料理の間ミレハ袖の花に昔を忍ぶ、とまはる也。

伊勢物語

夜か明けはきつにはめなてくたかけの

またきに鳴てせなをやりつる

此歌はくたかけのよりよみはしむる歌也。此うたの躰なり。

(※頭注)

桐の木、此句は鶉を鳳凰にたとへてほめたる句也。仍而松の木とも杉の木ともならず。桐の木に限る也。

桐の葉に待出ん鳥や雁の声 宗祇

袖の花、(ウ五) 盧橘の匂ひ昔を思ひ出す縁をとり、袖の花の五文字ニ落柿舎の懐旧を言たる也。仍而大根共紫蘇の穂ともならず、袖の花に限也。

五月まつ盧橘の香をかけはむかしの人の袖の香そする (ウ六)

○をまはし切

青くてもあるへきものを唐辛子

二書曰、青くてサエモと言葉を入れてまはる也。格法曰、七五の間へ、イハンヤと言葉を入るとあり。 (ウ六)

○大廻切 大廻は韻通にし立ると言人有、非也。

行春を近江の人とおしみる
あなとうと春日のみかく玉津嶋

此句は、中七文字にかまはず、上五文字より座の五文字へまはる也。近江の人と行春をおしむ、春日のみかくあなとうと玉津嶋、とまはる。
唐崎のまつ、大まはしと言説有、非也。

○下知切

むかしきけ秩父殿さへすまひひとり
注に及はず。定りたる切也。

○心切

秋かせに折れてかなしき桑の枝
是は、かなしや、と言句也。やの字をきにかゆる事、口伝。此口伝と言は、かなしきと置けは、跡へ哉と字を付て聞へ、
かなしやと言へは、感る心浅く、ア、かなしきかなと言へは、深く聞ゆる也。是、隅の手尔葉也。すみのてにはを心の切と言。

○句続切

わすれすは佐世の中山「にて涼め
海かれて鴨のこゑほの「かに白し
句続は、中七文字の余り字を、座の五へ持送る也。上五の余りを、中七文字へ送るも同し。すゝめ、下知。白し、現在のしなり。切字に子細なし。
句続とは仕立之名」目
なり。疊語と言格也。

○押字

何の木の花ともしらす句ひ「かな
此哉、しつみてとまらず。仍而、ともと押へて切る也。此句、丹波にての句也。始はしらすとしたりしを、後しらすと直し給ふ也。しらすとすれば、哉、自定成りて、押へ字無用になる故、しらすと直し給ふなり。扱こそ、切字重疊すると言へり。

老の名のありともしらす四十雀
松節をたかすともよき月夜哉

此かな文字かな也。

○抱字

夕顔「や秋はいろくの瓢「かな
此句は、夕顔は、と言句也。はの字重る故、やの字を雇て置たる也。夕顔やと言時は治定のやなれとも、やとふたる字故、切にならず。座の哉も、文字哉にて切れず。秋は、と抱へて切る也

赤々と日はつれなくも秋の風
唐崎の松は花よりおほろにて

此句、大廻しと言説有、非。

○重切

奈良七重七堂伽藍八重桜
重きりは、みよし野、芳野、滝に、など言葉重る也。何れの字を切と言事なし。疊字と言格也。
昼顔にひる寐せふもの床の山

右十八之切、秘中之秘なり。

「(ウ九)

○哉に五品有事、「文字哉」、「浮哉」、「沈哉」、「呼出哉」、「治定哉也。治定は切字、其外は不切、其訳、左三言。

捨手尔葉ある文字を哉にとむれば、浮沈出来る也。浮沈四境、左に記。

句ウクふ 句シツムひ 舍ウクる 舍シツムり 別ウクる 別シツムれ 恨ウクむ うシツムらみ

ケ様之類也。フルムの類はうくなり。ヒレリミ、此るひは、しつむあり、又しつまぬあり。しつまぬは、治定也。」(九)口伝、浮哉は覺に通ふ。らんは、うたかふ心により浮とす。沈かなは、けりにかよふ。けりは、おとしつけたる心によりしつむとす。

文字哉は、にてに通ふ。是は、捨手尔葉なき字を哉にとめてうこく故、文字哉と言。秘中の秘なり。證句。

沈かな

何の木の花ともしらす句ひ「かな

此かな、けりに通ふ。沈なり。

前髪もまた若草の句ひ「かな

此哉、通ひ字なし。治定也。

浮哉

狂句木枯の身は竹斎に似たる「哉

月ほそし白魚のいさりもゆる「哉

文字かな

夕顔や秋はいろくのふくへ「哉

水浅く根は深芹の野沢「哉

右三章之哉は、上に押字、抱へ字、亦是治定の切字歟、語

絶歟、なくては不留。

此外に上に切字おかすして留る浮哉、二品有。左に記。

上に隅のてには歟、余員歟、あれは留る也。すみのてには

六
と言は、五七五の間へ字をあますを言也。桑の枝の句に手引する事也。余員と言は一字を半言て用を達するを言也。

○余員

浪た、てあつき鉦をけつる哉

浪た、いてと言事を、た、てとち、むるなり。

あられちのあや織(虫損)みたる冬(虫損)の

みたる、をみたるとち、むる也。

○隅の手尔葉 二□ 三十 五十四 八十七委し。

秋かせに折れてかなしき桑の枝

すみのてにはにて切字を消事有。先へ出す。

上に切る、所なくて留ると言は座の哉うこかされは留る也。

沈かなの所に手引さる、何の木之哉と前髪のかなの心也。

○暁山集沈かなとて、

そらかける鷹はむかひの鳥を「かな

名月に旅たつ人は須磨へ「かな

むく起に髪結ふ人ははなに「哉

此三句、何れも跡へ言葉つく也。鳥を哉、取に行。須磨へ

かな、くたる。花に哉、行なるへし。沈哉と言事、心得か

たし。哉の跡へ言葉つけは、呼出しと共言にや、不知。

○先師、夜話に、句中へ又の字入れは、切れる也、と言はれき。按、

重又にても地またにても、ものニツ重る心也。さすれば切に

用る事、左も「(三)あるへし。

○治定の切字を置ても、言葉続けはきれす。たとへは、一より十迄数字を双へ、中へ切を入たること（虫撰）幾ッ切ても数はつ、く也。切字は続かぬを切とす。

雪重「しとはかりほゆる荷持哉

風寒「しとて障子さす夕部かな

○すみのてにはにて切字を消ス事

袖にこそちきり花をる野分かな

是はこそあれと心に余す也。十九のてには「（オ三）」なり。右に言、切字有てもことはつ、けはきれぬ格也。

○三世のし

過しは、ヌル、タル、ツルに通ふて語絶せざる故、切に不用。現しは、キ、ク、ウ、イ（虫撰）通ふ。しかれとも、言つめる故、切（虫撰）用、未しは過しをに（虫撰）こりてかよひ字なし。

美濃にては、未しはズにかよふとて、馬士の句を證句として切（虫撰）不用、非也。

馬士はしらし時雨の大井川

「（オ三）」

此句、むまかたはしるまし（虫撰）と言（虫撰）る也。ズに（虫撰）□道理なし。

○そと言てこそに通ふ格

中将姫

中々に深山の奥ぞ住よけれ草木か人のことを言はねは

此そにて考へし。

○花鳥結ひの句

花を明白に言ならば、鳥は何鳥とささとる（虫撰）やふにすへし。鳥を顯はすならば、花を「（ウ三）」何花とささとらすへし（虫撰）

折はよく鳥も出であるさくら狩（虫撰）

咳けはうくひすにけてかほりけり（虫撰）

○第三之伝

蝉（父字）もまた定まらぬなくとところ（父字）

韻通也。転回とも言

ひたすらに（父）□□（虫撰）るちかひは丁子風呂

五字一名也。

冬日

花蕨（母）馬骨の霜に咲帰り

「（オ四）」

冬日

檜（母）ひの木山家の体を木の葉降（虫撰）

此両句すみのてには也、唸し終

跡へはの字付ル。

分別（虫撰）の落るところは□（虫撰）かな

是はまての心也。

我家（母）と思はすそらの庵からん

挟箱（母）もたせす声を賑ふとは

鳴からにくつはも鈴も松むしも^父

右馬骨より六句ともに、一ヶ所つゝ韻通に仕立^ル也。秘なり。^(虫損)
此外もなし留あり。翁生涯二句にて其後止たまふ也。四句
目^(ウ二)におよほしかたき故也。

女旨

声からず山ほと、きす日暮ても。

此句は、日暮てにて済句也。もは除字とて字の足らぬを補
ふたるもの也。の留の三と同し事也。のとめの事、二書に有。

嘴ふとのわやくに啼^(虫損)の春の空

此留り不解。貞室の滝の月の格敷。

「(オ一五)

○

其角

蚊柱に夢のうき橋かゝるなり

晋子生涯此体を学はれたり。

定家卿

はるの夜の夢の浮橋とたへしてみねにわかる、横雲の
そら此歌より出たるとなり。

○先師曰、ホ句に「死」活あり。心得へき事也。

もし葛て飼は、育たん花の魚^{浪花}嗅洞

かくほら、半時門人、天明の比の人

「(ウ一五)

此句は、葛の外白魚の餌になる物なしとなり。左あれば育
たぬ也。此句の体、死の句也。

侍に折つて囉ひし牡丹哉

備柳亭撰三保閨奉納秀逸の内也。

此句ほたんの盛なるを折て家つとにおもひながら、さす
かに折かねたるを、士の血氣にまかせ折たる体也。偏^(虫損)に侍

の気丈をほめたる句也。

盛判して曰、「若木の桜は一枝を切らは一指を切るへしと制

し、「浪花の梅は」^(オ一六)その女か嗅見るのみを、家つとに^(虫損)

せよとさとす。此二條は花をおしみて也。花は手折らて詠^(虫損)

ることぞ、風雅の道にも叶ふへし。尤つたしなとやうの深山^(虫損)

□はなは折とも可なるへし。牡丹は、一本に一輪か二輪敷^(虫損)

ならては咲かぬ花を、なさけなく折取事、是死の句也。

咲しより散はつる迄見しほとに花のもとにて廿日へに

けり

此歌より、ほたんを廿日艸と云。

ケ様に言こそ、花を愛する本意なるへし。 「(ウ一六)

高砂の夫婦誰かせん玉祭^{伏見}十人

十人は元禄頃の人也。

高砂の松はいまに栄へてあるなり。しかるを玉祭の数に入
る、是死の句也。

盛曰、此句を

高砂の夫婦誰か呼生身玉

ケ様に言ならば、活の句也。

「(オ一七)

「(ウ一七)

「(表表紙
見返し)

二、「諸国俳人名寄」

〈解題〉

手銭家五代当主有秀(明和八年〜文政三年)のものと推定され
る「諸国俳人名寄」、すなわち有秀と交遊のあつた俳人の名簿であ

る。「文化八未霜ふり月に是をはしめぬ」と冒頭に記される備忘録（大本一冊、仮綴じ）中に記載されたものである（本稿では、当該部分のみを翻刻する）。東は尾張名古屋の土朗から、京・大坂の俳人、また中国・四国・九州各地の俳人と交遊を持っていたことが判る。ただし、「未冬」（文化八年冬）、「申夏」（文化九年夏）頃から「亥九月」（文化十二年九月）、「文化十三子ノ秋」頃まで、五年間程度の間のメモである。したがって、実際には、もっと多くの俳人たちと交遊を持っていたことが想像される。有秀の伝記的資料としてのみならず、近世後期の俳人の交遊の実態を伝える資料として貴重である。なお、翻刻にあたり、丁付は当該部分のみの通し番号とした（この名寄を収録する備忘録の書誌情報も省略した）。

〔翻刻〕

諸国俳人名寄

尾張

琵琶蘭士朗 井上専庵

イヨ

二畳庵楞堂 申夏文通 角や栗田与三左衛門

豊後

武人 一宮本之充 未ノ冬文通

長州下関

殿峰 西細江町久太郎 町人也 未冬文通 申四月返

事到来

筑前武丸

泉左 大庄や役家也 伊豆善次郎 申六月文通

同 薄多

芳杉

サツマ鹿子嶋

琴州 素良周右衛門 町人 未冬文通 返書

到来

長崎

鞍風 香月丹丘 医也

同州

天外 藤田氏 当時テイハツ 町人也 未冬文通 返

事到来

同州

祥禾 平田庄左衛門 町人也 申六月文通

芸州広島

篤老蘭田禾 御徒

ハン州加西郡殿原村

寸樹蘭浪一 青山源左衛門 百姓 書状到来 追々文通

同 加東郡宗匠同行

楞庵田旭 佐一左衛門 百姓

丹波タキノ郡

武菱 百姓

若州小浜御家人 熊川町出役人

止観 宮川善右衛門 御同心 申六月文通 返書

到来

出羽 進藤源泉 つくしニ罷下り申四月十九日殿峯添

書

冬月 此方へ参ル 三十歳斗之惣髪帯刀也

京 はせを堂 第一詩哥人 誹も少しいたす

蒼虬

申夏日之□便 文通 返書到来

〔一〇〕

〔一〇〕

大坂 黄花庵

升六

申初夏日之□便 文通 返書到来

若狭

蟻行

熊川の町家 嶋屋勘左衛門 申秋書翰参ル返事

遣し候

大坂

月居

「(オ三)

下関、

巢居

平角

阿波勝浦郡小松嶋

芝山坊 石丸公禎

亥九月参ル

「(オ三)

定雅^貞

芳中

江戸 神明前

芝山

子二月書翰到来

万和

下関

蘿風

油屋仁右衛門

亥の年書翰到来

月孤

伯州榎大谷村

古八千坊

牧牛

牧野吉三郎

出会

木僊

肥前漢津^{マコ}

今八千坊

古宵房

文化十三子ノ秋日々庵テ一会 半歌仙

屋羽

江州さめかいの大家

大坂

嵐角

小野田孫右衛門

井眉

「(ウ三)

長府

サヌキ

再馬

梶山小十郎 桜庵と号ス

隱翠

同

京

伍立坊

品川又右衛門

「(三三) 終り

雪雄

仙台

乙二

〈付記〉

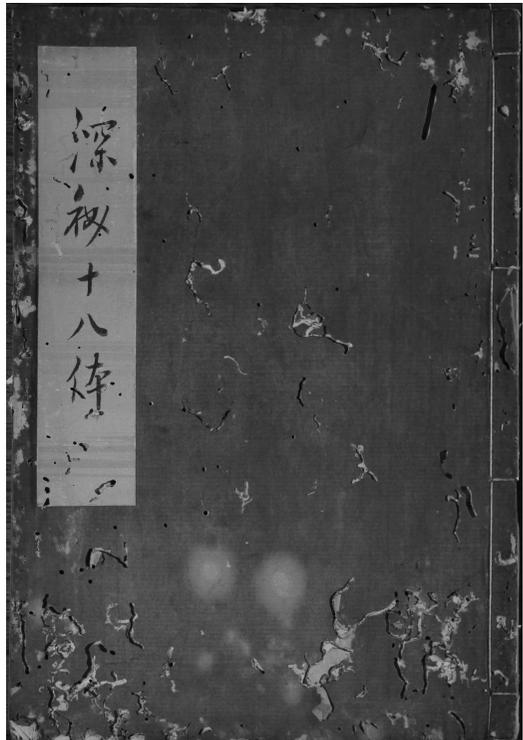
本稿をなすにあたり、手銭家の皆様には特段のお世話に与りました。また、手銭記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」(二〇一六～二〇一八年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文学享受」(代表・大高洋司)、科学費補助金(基盤研究(C))「人を結びつける文化」としての俳諧研究」(研究課題番号・二六三七〇二五九、代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

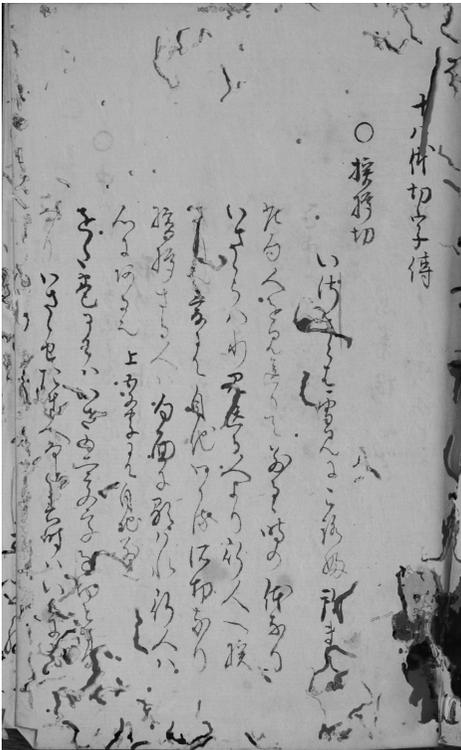
なお、本稿は、拙稿「季硯句集『松葉日記』—手銭記念館所蔵俳諧資料(一)—」(『山陰研究』第六号、二〇一三年二月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(一)—手銭記念館所蔵俳諧資料(二)—」(『湘北紀要』三五号、二〇一四年三月)、同「百羅追善集『あきのせみ』—手銭記念館所蔵俳諧資料(三)—」(『山陰研究』第七号、二〇一四年二月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二)—手銭記念館所蔵俳諧資料(四)—」(『湘北紀要』三六号、二〇一五年三月)、同「衝冠齋有秀追善集『追善華罍粟』—手銭記念館所蔵俳諧資料(五)—」(『山陰研究』第八号、二〇一五年一月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(三)—手銭記念館所蔵俳諧資料(六)—」(『湘北紀要』三七号、二〇一六年三月)、同「椎の本花叔編『椎のもと』—手銭記念館所蔵俳諧資料(七)—」(『山陰研究』第九号、二〇一六年二月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(四)—手銭記念館所蔵俳諧資料(八)—」(『湘北紀要』三八号、二〇一七年三月)、同「百羅俳文集『さりつ文集』—手銭記念館所蔵俳諧資料(九)—」(『山陰研究』第十号、二〇一七年二月)、に続く研究成果である。

〈参考図版〉

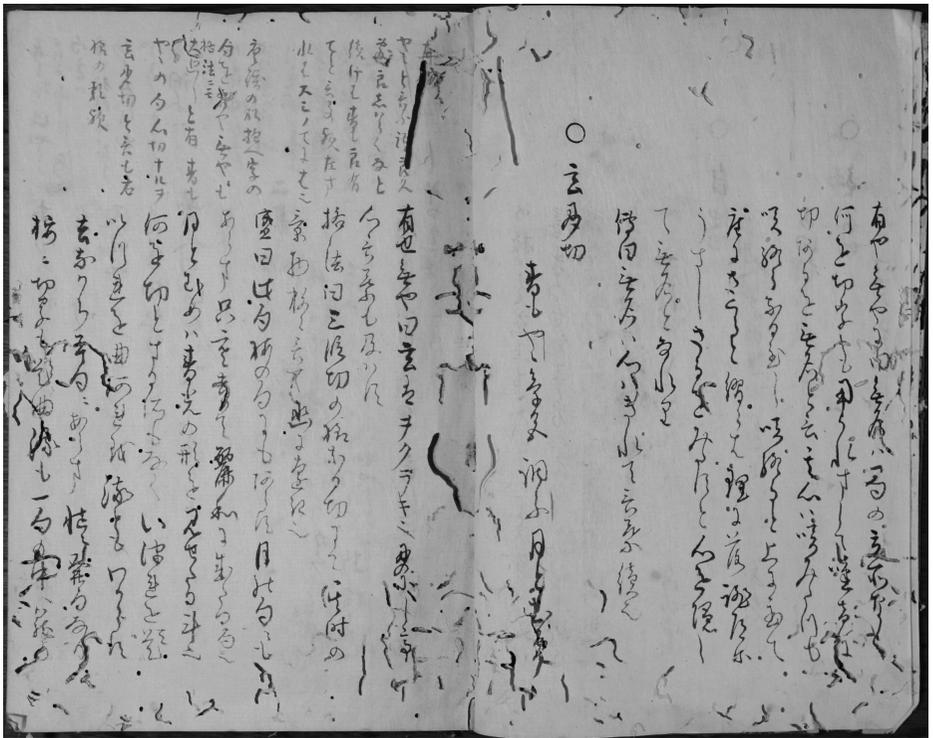
1. 『深秘十八体』表紙



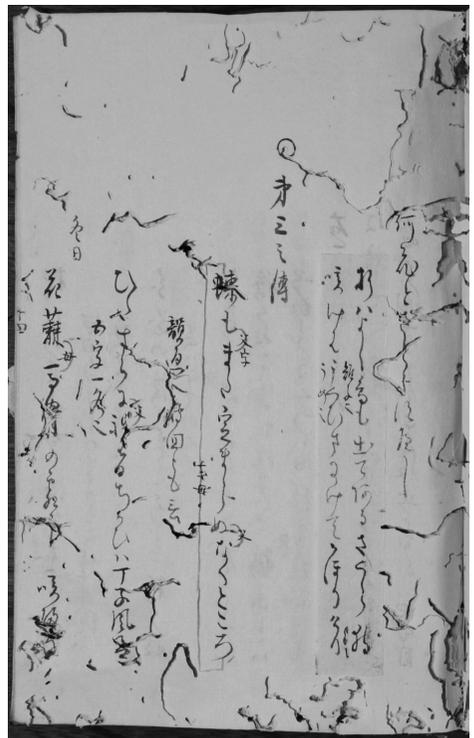
2. 『深秘十八体』一才(巻頭)



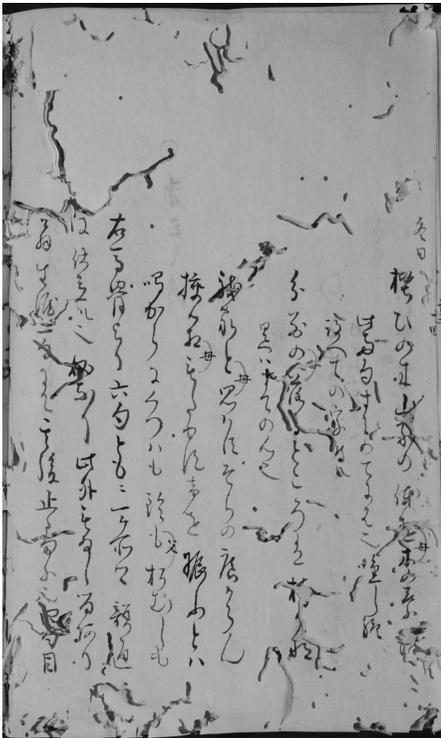
3. 『深秘十八体』二ウ・三オ

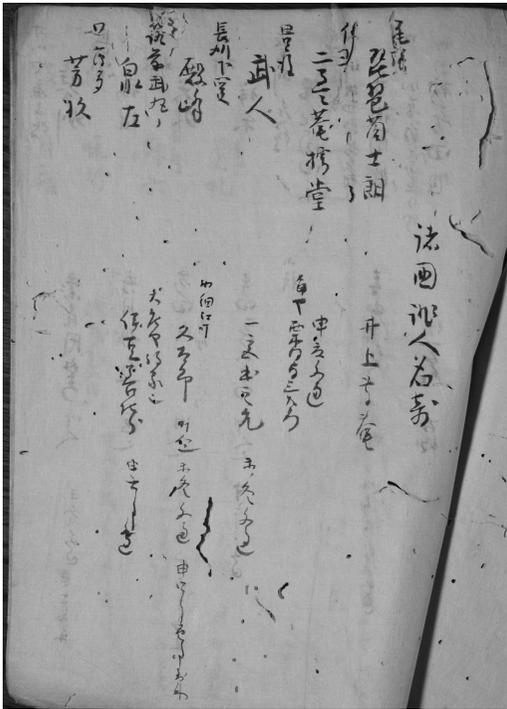


4. 『深秘十八体』十四オ



5. 『深秘十八体』十四ウ

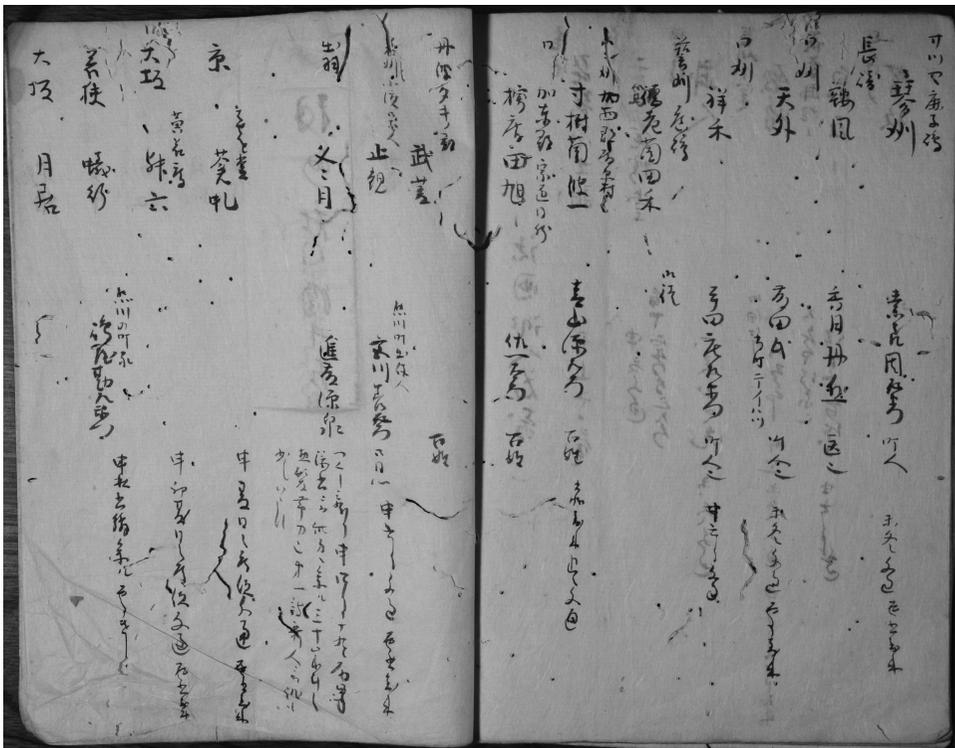




7. 「諸国俳人名寄」一才（冒頭）



6. 「備忘録」表紙



8. 「諸国俳人名寄」一ウ・二才

